

私を育てた
あの時代、あの出会い

第7回

厳しくも温かい叱咤激励の全てが 新人の私の糧となった

埼玉県さいたま市立高砂たかさご小学校校長 小山勝 KOYAMA MASARU

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、小山校長が語る。

自ら先輩に声を掛けて
先輩の教えを請うた

初めて赴任した学校での日々は、その後の教師人生を決める中身の濃いものでした。私は一度、大学を中退して別の大学に入り直したため、教師になったのは27歳の時。ストリートで大学を卒業した人たちは既に教職5年目であり、私は少し焦りを感じていました。

当時は初任者研修などなく、私は先輩方が子どもと接している様子を観察して、見よう見まねで授業や課外指導に取り組みました。また、少

しでも成長の糧に出来ればと、この人と思う先輩を見付けては積極的に声を掛けて教えを請いました。当時私と同じ5年生の担任で、学年主任をしていた久保田重治先生はその一人です。

久保田先生は、焦り気味の私に「教師の力量は、物理的な時間の経過とは関係ない」とおっしゃいました。勤務年数が1年だとしても、3年分の力量を付けることは可能であり、逆に3年やってもなかなか指導力を高められない教師もいるというのです。「4年ぐらいの遅れは、すぐに取り返せるよ」と励ましてください



こやま・まさる 専門教科は理科。教諭時代は「理科サークル」や「学級経営研究会」などに積極的に参加し、指導力向上に努めた。さいたま市立下落合小学校校長などを経て、2011年度から現職。

1980 (昭和55)
新採として
浦和市立大里小学校
(現・さいたま市立
浦和大里小学校)
に赴任



大里小学校の先生方と。
左から3番目が久保田先生、
4番目が高山校長、
5番目が小山先生

1991 (平成3)
浦和市教育委員会
指導主事となる

2004 (平成16)
さいたま市立
下落合小学校に
校長として赴任

2007 (平成19)
さいたま市立
教育研究所長に
就任

2010 (平成22)
さいたま市
教育委員会
学校教育部長に就任

2011 (平成23)
さいたま市立
高砂小学校に
校長として赴任

「子どもの変容を促す授業が出来る教師集団をつくりたい」



ました。

また、久保田先生には「小学校の教師でも、これだけは誰にも負けないという専門の教科を究めるべきだ」と言われました。私は大学で理科を専攻していたので、早速、教員が自主的に理科教育を学ぶ「理科サークル」に入り、学習指導案や教材づくりについて勉強しました。

理科の指導技術を磨くことは、他教科の授業づくりにも役立ちました。理科の授業を通して、子どもが

どんな場面で気付きを得たりつまじいたりするかなど、子どもの理解を深める上でも役立ったのです。

やっと校長先生に褒められる授業が出来た

初任校には、新人の私を厳しく、かつ温かい目で見守ってくれた先生がもう一人いました。高山昭次郎校長です。

高山校長にはよく叱られたものです。私の授業を教室の後ろで見学

し、「この45分でどんな力を子どもに身に付けさせたいのか」という目的が曖昧だった時や、子どもの言動に引っぱられすぎた時など、「小山の指導の仕方は甘い！」と厳しく言われました。高山校長が私への奮起を意図してそうした発言をされたのは分かりませんが、頭ごなしに言われると「なにくそ」と思うものです。「いつかは校長を見返したい」という思いが、教師としての力量を高める原動力となりました。

高山校長には、子どもの可能性を引き出す大切さも学びました。市のスポーツ大会の時のことです。私は「子どもが一生懸命練習することが大事で、結果は二の次」と考えていました。しかし、高山校長は「努力を成果として子どもに返すことは教師の務め」とおっしゃったのです。「頑張ったから優勝できた」「自分もやれば出来る」という達成感を与え、自信につなげるとの考えでした。

その後、高山校長と私は別々の学校に異動しましたが、ある時、高山校長に授業を見ていただける機会が訪れました。研究発表会に先生が来てくださったのです。教科はもちろん理科です。

研究発表で取り組んだのは、学習指導要領改訂によって新たに加わった「人の誕生」という5年生の単元です。私は子どもに、自分の命が生まれたことの不思議さに目を向けさせ、理科への興味に結び付けたいと考えながら授業をしました。ずっと見ていた高山校長は、授業が終わった後、一言、私にこう言ってくれました。

「とても感動的な授業でした」
褒められたのは初めてでした。叱られっぱなしだった私は、やっと先生から認めてもらえる授業が出来るようになったのです。

私が一人前の授業を出来るようになったのは、新人時代に周りの先生から励まされ、時に叱られ、助言をいただいたからです。管理職として若手の先生を指導する立場になった今、彼らに言うのは「授業力を磨きなさい」ということです。学習の主体は子どもですが、授業の主体は教師です。教師が授業研究を重ねることで授業力が高まれば、子どもの変容を促す授業が可能となります。指導計画づくりや教材研究などに熱心に取り組む教師集団を、これからもつくっていききたいと思えます。